

文化財 やまと

大和村文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

私共は次の代の人々のために何をなすべきか。大きなことをいつていても始まらぬ。私たちのささやかな使命は、足元をしつかり見つけた文化活動でなければならぬ。文化財を愛し、これを守り、伝えることは、必ずや将来に花を咲かせ、こよなき次代への贈物となるであろう。

文化財を十倍楽しめる方法として、私はまず、手から、足から、頭から、そして心からと心掛けていく。手というのは、

史料集収のことであり、足からとは、見学である。見学・旅行では物よりも自分を見るのが大切である。仏前では仏に照らされて自分を見る。自分の幸福を祈るのでなく、仏前で自分自身に出会うのである。頭でということは、考えること、現在の文化財人は考えなくてはいけない。お寺に参って仏を拝み、話を聞くにしても、その時代の背景を考えて聞くようにすると、一層興味が湧く。心とは好きでなくてはできないということである。佐藤良次さんが、太平洋から日本海まで桜を植えた。こ

れが本当の文化財人である。根元の薄墨桜を見に行つて「古代を見ろ」というパンフレットをもらった。千四百年も前に植えられたものという。そのころの時代は歴史。上謎の多い時代であるが、二五代武烈天皇は悪名の高い天皇である。たとえば、生れる前の赤坊が見たと、孕った女の腹を裂いたり、鹿狩のときに狩人の一人を木に登らせ、これを猿に見立てて射落させたという。この天皇に子が無く

つと子供を叱るとすぐブンとふくまれる。母親の味を知らない子が暴力を振う。母親も母乳があるのにインスタントで間に合わせている。母親とのスキミングがない。子供といっしょにご飯を食べる時間がないという忙しい現代、合理主義というのか、むしろ近道主義である。宝くじで一山当てようというこことになり、女は歌手に男は野球選手になって、一日数万円もとることを夢みる。労働に合っ

た報酬を受けるという常識からはみ出した時代が現代でなからうか。また、何くそという気概が無くなった。子供に魚の骨をとって食べさせるような母親ではない。文化財もそうであると私は思っている。文化財はコンクリートの中からは生れない。こうした大自らのあたたかい環境と、豊かな人間愛の中から育つものである。インスタント文化に侵されてはならない。文化は物をもってすれば文明となる。心を豊かにするのが文化である。物慾という悪魔がしみ入ると、核とか、経済大国とか、恐いものとなる。後世に残る文化財に深い愛情をもって、生き甲斐を感じる人生でありたいと願っているものである。(文責有代)

インスタント文化財の背景

岐阜県文化財保護協会会長

松田 充

越後から男大猷尊(応神天皇五世の孫)を迎えて二六代継体天皇とした。この天皇が薄墨桜を植えたと伝えている。この皇位継承にも残忍苛烈な肉親の殺逆などがあつたが、こうした時代背景を考えて、薄墨桜を眺めると一層興味深く見ることが出来る。

現代はインスタントの時代といわれる。インスタントとは間に合わせ、即席ということである。ちょ

私の幼いころの思い出を一つ。五才の時であった。祖父の投網の重りの傷んだのを盗んで遊んでいて、これがかかって、そんな子は生かしておけないと、二階の窓から突き落された。お前が助かったのは、まだ見込みがあるからと許してくれたが、母は傍でじっと見ているだけであった。私の一生涯

(注) 右は、昨年六月二十六日、当大和村支部総会における、記念講演の要旨です。(編集部)

古今伝授と 明建神社の連歌碑

野田直治

1. 連歌碑

文学史上に名高い古今伝授が、

現在の和村で行われたことを知ろうとすれば、明建神社の大鳥居前にある常縁・宗祇の連歌碑を見逃してはならない。碑面には特色のある書体で次のような連歌が刻まれている。

花盛り所も神の御山哉 常縁
さくらに匂ふ峯の榊葉 宗祇
春もなかば、城北の妙見宮（前記明建神社）は、さくらが満開である。古今伝授の師と弟子、東常縁と宗祇法師はそろって花の妙見宮へ参拝した。妙見菩薩は、遠い昔、染谷川の合戦以来、東氏が一族の守護神として尊信し、郡上郡来治のとき、下総国から奉遷してきた神で、これを祭った妙見宮は代々の領主はもちろん、領民の信仰が厚い神社である。常縁はこの神苑を「神のみ山」と詠んでいる

が、そこに咲いたさくらの花にも神苑にふさわしい崇高な美しさを感じたことであろう。これを受けて、宗祇はさくら花に引きたてられた「峯のさかき葉」を詠んで脇に据えた。社殿の裏山の常縁樹を「さかき」と詠んだのは、これを神前に供えた神と見立てたからで、山全体を神への供え物と見る、たいへん大きな発想である。常縁の発句が、花やかなの



に対し、宗祇の脇句には神々しさを感じられる。

2. 建碑の由来

この歌碑は、明治三年九月に明建神社氏子の有志によって建てられた。その由来については、日置弥一郎（日置一朗氏の曾祖父）の手に成る「宗常縁御連歌石碑建立勸進帳」に記されている。それによると、石碑の建立は、妙見宮の神主粟飯原豊後（慶応二年没、六一歳）のとき、思い立たれたようである。選文は豊後、筆跡は八幡町の歌人で俳人でもある大野春彦（明治三〇年没、七五歳）である。すなわち、豊後は生前この歌碑の建立を思い立ち、当時郡内第

一級の歌人として世評の高かった大野に染筆を依頼したのである。しかしその計画はすぐ実現したわけではなかった。発起者の豊後は明治維新を待たないで病没し、大野もまた碑の建立を見ないで世を去った。その後を受けたのが、神主家の近親である日置弥一郎である。父祖の遺志を嗣ぎ、氏子有志者の協力を得て、ようやく歌碑ができたのは前記の通り明治三年で、豊後が没してから、実に三五年後であった。

いま、この歌碑の前に立って眺めると、文字には春彦独得の力強さが感じられ、この人の筆跡によって、この歌碑ができたことへの限りない喜びを感じると共に、その建立に尽力した先人たちの高い識見に厚く敬意を表したいと思ふ。

3. 連歌の出典

碑文の連歌は、何によったのだろうか、出典は記されていないけれども、現存史料として最も価値の高い東家所蔵の「常縁集」村史のを見ると、それは「山田庄栗栖妙見の社にて」ということが書きがあって、前掲の連歌がある。

4. 宗祇の長歌

文明三年の古今伝授から数年後の文明八年（または九年）に、宗祇は次のような意味の長歌を常縁に送って、再度の教えを所望している。

「文明三年、東常縁から古今伝授を受けてきた数年後、さらに教えを受けたことがあって、差し上げた長歌

(前略) 古今伝授を受けてから早くも五、六年過ぎ、空しく年をとって行くのを歎いていますが、思いがけもなく、この春お目にかかることができて、こんなうれいことはありません。どうか、今いっそう深いお教えを賜りますよう、神かけてお願ひします。」

この長歌の終りの部分を原文で示せば、次の通りである。

「いま一入の 言の葉を 聞くが上にも わが頼む 神のお前の 神葉の さしていたらん 道を 教えよ」

右の「神のお前の神葉」は、故河村定芳教授〔東常縁の著者〕も指摘したように、妙見社頭の連歌を回想して詠んだものと推定される。この推定は、次に掲げる常縁の返書によって裏づけることができる。

5. 常縁の返書

これは、宗祇の長歌に対する常縁の返事であるが、その一部を要約して抜き出せば、

「長歌一首、拝見しました。氏神(妙見神)両神(和歌の守護神)もごらんください。まことに見事なできばえです。今の世にこれほどよくできた長歌は珍しい」

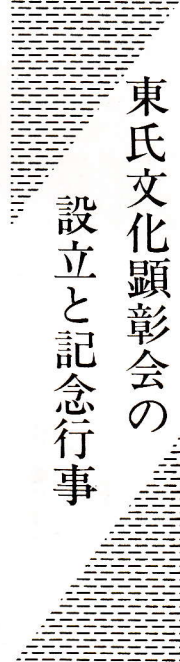
と、宗祇の長歌を賞賛し、特に「神の御まえの 神ばの さしていたらん道などというのは、すばらしい表現です。妙見菩薩もごらんください。うらやましいほどのできばえです。さっそく返歌を差し上げたいが、私にはとても一句も詠めそうにありません。」

と、妙見菩薩を引き合いにして、絶賛しているのは、やはり妙見社頭の連歌を念頭において詠んだことを証するものといえよう。

以上挙げたように、常縁・宗祇の交わした長歌と返書によって、妙見社頭の連歌は、決して他人の偽作ではなく、古来伝えられるように、常縁・宗祇の唱和であると断言して差し支えないと信ずる。このことは、また篠脇城下古今伝授の傍証ともなるものである。

(本会々長)

東氏文化顕彰会の設立と記念行事



昨春秋、東氏館跡庭園が国の名勝に指定されたのを機に、東氏文化顕彰会設立の儀が持ち上り、文協協会・文化財保護協会・商工会・観光協会・読書会・篠脇文化顕彰会・牧友会等の代表者によって設立委員会が設けられ、趣意書が村内に配られた結果二五〇名ほどの賛同があったので、去る三月二十日その設立総会が開催されました。

当日役員には、
顧問 野田直治、
会長 日置吾朗、
副会長 羽生 清・木島 泉
常任委員 奥村義雄・加藤吉男
書記 土松新逸、
會計 矢野原幸子、
監事 野田英志・土松洋司
の諸氏のほか理事二八名が選出されました。

右設立の記念事業として、東氏文化顕彰短歌大会と、東氏来治七

東氏来治七六〇年祭
日時 四月二十一日
会場 法要 東氏館跡 一時より
講演 牧公民館 三時より
古今伝授について
岐阜教育大教授
小瀬渺美先生

宝物 荇安乗性寺蔵
開帳 東氏関係の宝物
これも八〇名余りの参加者があり盛会でした。なお、東氏末裔である東胤驍氏(横浜在住)が、わざわざ来村参詣されました。(土松記)



和紙の里女呼び合ふ寒ざらし
諸人無碍ほとけ峠の花辛夷
落人の墓といふ石冬の月
寒月の煌たり東氏居城跡
薬師堂一樹の花の散り果てし
冬山に日まどへり義民の碑

大和村の特異な

植物について

田 中 裕

岐阜県は日本海要素の植物と、太平洋要素の植物の限界地域になっており、また、暖帯性植物、寒帯性植物の接点でもあり、学術上貴重な地域である。

特に郡上郡は植物分布の上から未知の部分が多く、興味ある地域であることは、植物研究に関係している人達の認めているところである。大和村はちょうどその中央にあり、ここを限界とする植物や特異な植物が幾つかあるので、それを述べてみることにする。

正月にかがみもち、こんぶ、ほしがき、だいたいとともにかざるウラジロは、暖帯性のシダで、郡上郡では美並村に多く生育しているが、八幡以北となると非常に分布が少なく、那比・剣・落部・内ヶ谷（金子弘之「郡上郡植物誌」）ぐらゐのものがある。落部（金子弘之「郡上郡植物誌」）のものは、村史の關係で八幡断層の調査に行った時、たまたま発見した。これ以北には現

在のところないので、大和村がウラジロの北限ということになる。

ヒカゲツツジは常緑のシヤクナゲに近い種で、美並村釜ヶ滝、八幡町那比あたりに多く生育してお

り、特に那比新宮のヒカゲツツジの群落は、県の天然記念物に指定されている。がけ一面に淡い黄色の花が一せいに咲いている様子はまことにみごとである。このヒカゲツツジが本村場皿に僅かに生えている。これも北限といつてよいようである。

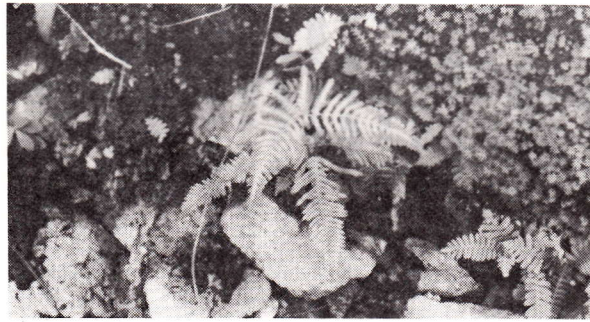
このほか、暖帯性のモチツツジが白鳥町あたりにもあるという報告もあるが、大体本村あたりが植生の北限とみてよいと思う。また、太平洋要素のヤブツバキについても、栽植したものは白鳥町やそれ以北にもあるが、自生している群落は本村が北限のようである。荘川村・白川村・古川町あたりからは日本海要素のユキツバキヒ移

行して行く。

アザミのなかまの分類は難物中の難物だが、文献によると本村あたりが限界のものがいくつかあるようである。

日本海要素の植物としてコシノコバイモ、スマレサイシンがある。ともに大和村と八幡町あたりが東南限と考えられている。

コシノコバイモは名のとおり越の国、つまり現在の福井県、富山県、新潟県であつて、このあたり



に多く生えており、静岡県伊豆半島の山中にも産するようである。クロユリに近いなかまである。

スマレサイシンは大型のスマレで、春早く花が葉に先んじて出てくる。スマレサイシンに対する太平洋要素のものにナガバノスマレ

サイシンがあるので、郡上にはこれも産するので、（那比・稚児山（金子弘之「郡上郡植物誌」））、郡上はまさに太平洋要素と日本海要素の接点といえる。

寒地遺存植物として貴重な存在であるトキノソウは、湿地に生えるラン科の植物である。県内では、東濃、飛騨、郡上それぞれ一部の湿原に僅かに生育している。

クロバナヒキオコシは日本海要素の植物で、従来高鷲村蛭ヶ野あたりが東限とされていたが、大和村史の關係で母袋方面の調査の際村有林付近で発見した。濃い紫色の小さな花で目立たないが、草たけは優に二mに達するものもある。これにはエンメイソウという成分があつて、胃の薬になる。

このなかまにヒキオコシというのがあるが、一名延命草ともいい、名のとおり命をひきおこすという意味である。この成分はプレクト

ランチンで、胃炎、胃アトニー、腹痛によくきくといひ、民間薬として昔から利用されている。

薬草については村史にも概要を記してあるが、更にくわしくはいづれ機会をみて発表したいと思ふ。

このほか、オシダも特異な植物にあげられる。四国、九州にも生育するが、本村付近では六〇〇〜七〇〇m以上の深山の樹林中しか生えない。本村では母袋烏帽子岳と内ヶ谷の山中に生育している。

コウボネ、タヌキモも特異な植物にあげられるが略する。

さて、本村を完全に限界とする植物は北限がウラジロ、ヒカゲツツジ、東限がクロバナヒキオコシといえる。その他のものは本村あたりが限界の中心といつてよいと思う。またアザミのなかまは今後の課題にしたい。このほかにも本村を限界とする植物が見つかる可能性は多分にある。それは植物も長い時間をかけてゆっくりと適応しつつ、また適応する地域へ移動するからである。

奈良方面

文化財見学記

有代 信吾

一月八日立冬の朝である。好天に恵まれた肌寒の朝靄の中、午前六時きっかりに、一行二三名、大和タクシーのレンタカーに乗り込み、奈良に向かって出発した。桑名インターから、名阪高速道に入り、車は快速に走る。車内では河合俊次先生が、正倉院展についてのお話と、仏像についても解り易く講義していただく、このお話を聞いただけでも、十分参加した意義があったと、皆さん大喜びであった。またアルコール類も、ウイスキー、純焼酎、ワイン、日本酒など、ことに本旅行の幹事役の木島泉さん手造りの桑の実酒、山ぶどう酒など大好評で、賑やかな談笑のうちに、正午ころ奈良若草山麓の朝日軒に着く。今晚の宿泊旅館である。ここで昼食をとり、バスですぐ近くの国立博物館に入り正倉院展を見学する。本年は第三六回目とか、初公開の二六点を含めて八七点、いずれも古代文化の粹を集めたものばかり、調度品・楽器・染織・服飾品などのほか、絵画・書跡・古文書の類が展示されている。なかでも銀の透かし彫りの鮮やかな銀薫炉、表面に山や花鳥、走獸仙人などの細かい彫金の技法で表した八角鏡、紫檀に金銀泥絵を施した書見台などが印象的であった。外に出ると汗ばむほどの暖かさ、藤棚の前で記念撮影。歩いて同じ公園内にある興福寺の宝物館見学、ここでも河合俊次先生の懇切な説明で嘆声をもらしつゝ見学する。国宝の銅造仏頭像（白鳳期）脱活乾漆造の八部衆立像同じく十大弟子立像（奈良時代）の個性的な表情の豊かさ、広い館内にずらりと国宝、重文の類が所せましとならんでいる。

ついで春日大社秋季名宝展を見学する。精巧を極めた調度品、武具、武器などがあったが、中でも秋季展に因み展示されたという秋草の意匠をあらわした手箱、笛

筒、蒔絵筥など、鎌倉時代の見事な調度品、精巧な彫刻の大鏡などは印象深かった。

外に出ると、もう四時半、あたりはすでに夕景となっていたが、薬師寺まで足を延ばそうというところになって、車は西の京へと向かう。折から生駒山系に沈む真赤な

夕陽が三重の塔を黒々と浮かばせ、古都の夕景にうっとりしているうちに薬師寺に着く。執事長の山田法胤師の案内で参拝。金堂では説明を兼ねて短い法話を拝聴する。

当時は興福寺と共に、日本では最も古い宗派の法相宗で、薬師寺はその大本山とのこと。三万坪あるという広い鏡内に

全国からの喜捨二〇億円で昭和五一年に完成したという金堂や本年九月に竣工した中門の華麗さ、青丹よしの奈良の枕ことばが、うなずかれる眺めである。

逝く秋の大和の国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲

と佐々木信綱が詠じたのも、丁度秋の今ころであったであろうか、折よく開扉中の国宝吉祥天女の画像が拝観できたことは僥倖であった。

山田法胤師に厚く礼を述べて帰路につくころは、秋の日も、すっかり暮れて橙色の大きな月が美事であった。奈良の人は「奈良の月屋根より出でて寺の上」といつているそうだが、全くその通りの夜景。旅館に着いたのは六時を回っていた。期待以上の豪華な宴席食べきれないほどのご馳走に皆さん大満悦で、それぞれおはこが出て賑やかな宴となった。

第二日目
出発前に、若草山の麓の散策、鹿と戯れたり、ナンキンハゼの紅葉に見とれたりして、八時三〇分バスで旅館を出発する。車は天理桜井と山の辺の道を過ぎ、飛鳥道に入る。見学第一番目は、飛鳥資料館である。一〇月から開かれている藤原宮発掘五十年展を見

昭和九年、多くの歴史学者、郷土史家等の手によって、この辺一帯が発掘調査され、藤原宮のすべてが解明され、館内には夥しい出土品やその模型が陳列されている。

館外には、ちょっとグロテスクな人とも猿とも分からぬような石造物があり、本物かと、よくよく見ると模造品であったりして、あちこちで歓声があがる。



藤原の古りにし郷の秋萩は

咲きて散りにき君待ちかねて

おおらかに恋を詠った万葉の歌人を遠くしのびつつ、石舞台へと向かう。石舞台古墳は七五トン以上もの花崗岩三〇個あまりで作られた方形墳である。玄室に入ると仰ぐと、機械もない時代にどんな工法で造ったのであろうか。またどんな人が葬られていたのであろうか。悠久の歴史の流れにしばし身を委ねて辞去する。車は、

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし

と万葉歌にある飛鳥川を渡って橋寺に向かう。だから坂を登って山門に至る。入った所に馬の銅像がある。聖徳太子の愛馬を模したものだぞうだ。もっとも古くからあったのは戦時中に供出されて今のは最近でできた物とのこと。この寺は聖徳太子誕生地に建てられた寺で天台宗である。鎌倉時代作の薬師如来が本尊とのこと。庭に

二面石という飛鳥時代のもので伝えられる石造物がある。人の心の善悪二相を現したものである。本堂右側に親鸞聖人の石像がある親

鸞聖人は特に聖徳太子を讃仰され、和讃の中でも「和国の教主聖徳皇」と讃えられ、また「私にとつて聖徳太子はお父さんのようであり、観音様はお母さんのようなものだ」と敬慕されている。そうした因縁でこの境内に建立されたものの由も一回万葉歌の厄介になると。

橋の寺の長屋にわが率宿し
童女放髪は髪あげつらむか
とまあ古いお寺だぞうだ。

ここで昼食の時間となるが、時間が勿体ないということで、車中で奈良弁当というのをいただく、まだ食べ終らぬうちに、高松塚古墳に着く、古墳はこんもりした岡の下に入口があるが、中には入れない。高松塚古墳は昭和四七年三月に発見されたもので、すぐ近くにある高松塚壁画館には、石槨内の状況、天井の星宿、及び壁画は前田青耶画伯らによって、原色、原寸で、全く実物と同じに模写されていて、參觀することができた。

車は、最後の見学箇所、橿原神宮境内にある泉立橿原考古学研究所付属博物館に向かう。広い館内には、奈良盆地の模型が大きく、

古墳、文化財などが、電気照明で一目で分かるようになっていて、旧石器時代を初め、縄文、弥生、古墳時代と時代別に出土品多数が展示してある。帰路の時間が迫っていたので、約三〇分間で見学を終る。

前日は正倉院展・興福寺宝物館春日大社秋季名宝展、薬師寺と四か所を見学し、二日目は、飛鳥資料館の藤原宮発掘五十年展、石舞台古墳・橋寺・高松塚古墳・橿原考古学研究所付属博物館と二日間わたって九か所の見学と盛りたくさんの強行軍のコースであったが、同好の気心の知れた者同志で和気あいあいの楽しい旅行であった。



国指定名勝となった

東氏館跡庭園

東氏館跡について前号で述べたとおり、昭和五年から五八年にわたる発掘調査の結果、検出された池を中心とする庭園遺構は、そのたたずまいが京都の名園にも匹敵するといわれ、昨年九月国の名勝に指定されることになりました。これはご存じのとおりであります。

この東氏館跡庭園が数少ない国の名勝に指定されたということは誠にすばらしいことと思えます。参考まで申しますと、岐阜県で国の名勝に指定されたのは、多治見市虎渓山永保寺庭園、美濃加茂市日本ラインに次ぐものであり、武将の館跡としては福井県の朝倉館跡庭園、三重県の北畠氏館跡庭園に次ぐものであります。

こんな尊い文化財が私たちの郷土にあるということに深く心をいたし、先人の残してくれたこのかけがえのない文化遺産を私たちの堅い総力でまもり、後世に伝えて行きますように。

しのわき山にて

東氏文化顕彰
短歌大会の日

土松 新逸

古えをしのびつつ登る坂の道かた
わらに見つめて在す石仏

雨後の陽光しのわき山にうらうら
と歌人たちの頬の色よし

はしり出の小さきわらび折り持ち
てひとの片頬に浮べる笑み

惣の針にからみし裾をはずしやる
この山原に風通りゆく

遅れ来るひとらの声をたしかめつ
九九折の路にしまらく立つも

次号原稿募集

- 一、見学記 八〇〇〜一五〇〇字
- 二、短歌 三〜五百首
- 俳句 三〜五百首
- 三、文化財保護に関する随筆

原稿〆切 八〇〇〜一五〇〇字

昭和六一年一月三十一日
発行予定 三月三十一日

宛先 文化財保護協会事務局
(大和村教育委員会内)

郷土芸能

牧の芸神祭

加藤 一男

牧区に伝わる郷土芸能に獅子神楽がある。獅子舞に併せて歌舞伎をまねた芸題を演ずるので、通称芸神楽といわれている。

今からおよそ一五五年前の天保一五年に妙見神社拝殿の再建上棟が行われた。それにこの年は近年まれな大豊作であったので、その祝いにと若い衆達が大島村(現在の白鳥町大島区)に向向き、大島の若い衆四、五人と獅子神楽道具を借りて奉納したのが始まりと伝えられている。それより五年後の嘉永二年に牧の人達によって、獅子神楽を奉納したとある。

その後奉納した記録はないが明治二年掛踊奉納の折この獅子神楽も奉納したと思われる。

大正四年に行われた大正天皇即位御大典を祝って掛踊りと共に獅子神楽も奉納したのであるが、なにしる明治二年以来二八年間も絶えていたので再興するのに大変苦労したようである。再び大島区

から師匠をたのみ指導を受けた。大正十一年、昭和の代に入って一一年、二三年、三三年、五二年に奉納した。

笛、太鼓、うたに合わせて獅子を回し、一人で二役、三役と演ずる芸題は六つ程あります。そのあらましを説明しておきます。

1. 信乃田
千年も生きてきたという狐が信乃田の森に住んでいた。獵師の悪右エ門共に狩り出され、あやういところを安名という若者に助けられた。その時安名は大けがをして

いた。
狐は、命の恩人である安名を介護せんと、「葛の葉姫」という人間に姿をかえ、一日も早く全快を」と一途に介護しているうち何時しか夫婦の仲となり、子供までもうけたのである。しかし畜生の悲しさを、或るとき、ふと我が子を口にくわえていたところを夫に見られ

た。男の意地にも梅川を身受けするため、遂に客からの預り金の封印を切って使い込み、追われる身となった。当底逃れない身としりつ

つ、死ぬ前に父親孫右衛門にひと目会いたいと、梅川と忠兵衛は生まれ在所の大和国新口村へと死出の旅路を急

の縁もこれまでと、恋しくばたずね来てみよ泉なる

信乃田の森のうらみ葛の葉の一首を残し泣く泣く我が子と夫を後に信乃田の森へと帰ってゆくのである。

我が子を背にあやししながら獅子が筆をくわえ、障子にこの歌を書きあたりのこの芸題の見どころといえませう。

2. 梅川、忠兵衛
歌舞伎でも有名な近松門左衛門作「冥途の飛脚」の一コマで、遊女梅川と恋仲となった大阪の飛脚屋、亀屋の養子忠兵衛が、恋がたきの八右衛門にさんざん卑下され

た。男の意地にも梅川を身受けするため、遂に客からの預り金の封印を切って使い込み、追われる身となった。当底逃れない身としりつ

つ、死ぬ前に父親孫右衛門にひと目会いたいと、梅川と忠兵衛は生まれ在所の大和国新口村へと死出の旅路を急

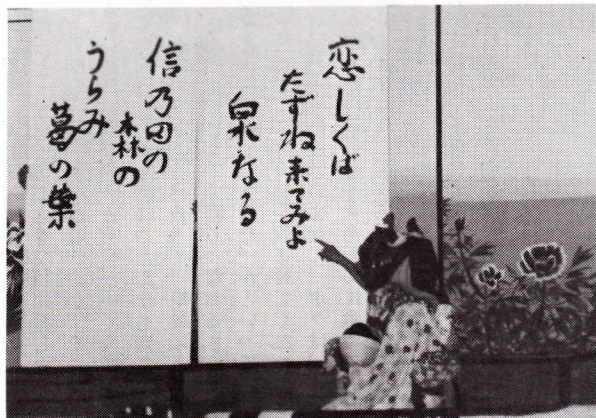
ぐのである。
3. 千両幟
関取稲川は、芸者の身受金式百両の工面に苦慮している。角力敵の鉄岳に「水心あれば魚心」と、暗に明日の角力に負けてくれればその身受金を出してやってもよいと、惨々にののしられあまりのくやしさに男泣きしている。

夫のなげきをふすま越しに聞いていた妻は夫の心情を察し、親父

播州赤穂浪士早野勘平は、主君浅野長矩の仇討に加わるための必要な金策に日夜苦心している。妻の「おかる」は、夫に忠節を果たさせんため、遊女に身売りして、一力茶屋につとめている。

江戸から帰った兄の平衛門は、母親からこの事をきき、一力茶屋に「おかる」を尋ね、お互の無事を喜び会った。「おかる」は、ふとしたことから客の大石由良之助の手紙を見てから急に身受けされることになったと、身の上話をした。

しかし兄の平衛門は、大事な手紙を見られたので、身受けのうえ、殺されるのではないかと思ひこみ、せめての情けに兄の手にかけ殺そうとするのである。



(妙見)

明建様の不思議・二話

高橋 義一

第一話 明建様のバチ

II 体験者 筆者

ボクが小学校一年生の時の話です。昭和八年一月下旬、ある小春日よりの日曜日、四年生ぐらゐまでの近所の悪童連中五、六人が牧の明建神社まで遠足しました。

その数日前、悪童連れの頭カブを中心にして遠足が計画され、最年少のボクにも誘いがあったのです。当時、小学校剣本校では、春の遠足は、二年生が牧の明建までと決まっていた。その道のりを経験した上級生から、明建の長

刀清水や美しい桜の花のトンネルをくぐりぬけるさまを、ボクは目を輝かせながら聞いていました。いわばまだ見ぬ明建様の魅力に取りつかれていたわけです。

さて遠足の当日は、握り飯三個ほどの風呂敷包みを、母に背負わせてもらって、朝一〇時ごろ出発しました。下剣のボクの家から明建様までは、四mばかりあります。

途中じゃれごとの遊びをしたり長刀清水を見たりして、明建様へ

着いたのは昼ごろでした。すぐ昼食となりましたが、水筒なんか無い時分だったから、明建様の手洗水をくんで済ませ、食後はドロボーゴッコをして境内の大杉どころをぬって飛び回りました。夕方三時

半ごろでしたか、上級生がもう帰ろうかと呼んだ時は、まだ遊び足らなくてうしろ髪を引かれるような思いをして帰りました。

家に着いて入口の敷居をまたぐと挨拶をしたが、声が立ちません。すでにとつぷり暮れていて、家中はうす暗い電気の下で、夕食の最中でした。短日の三度の食間にも

オヤツが無い時代、ガキツ子を多く抱えた家では夕食が早く、一人、二人いなくても待ってはいられないのでした。著を休めた父母が、「どうしてお前、声が出ないんだ」と聞く。

「ほん今まで、五郎まんたと話をしながら帰り、最後に五郎まと、さようならと声をかけ合って別れたばかりなんや」と答えました。

ボクの口の動きを見つめて両親は言葉を判ずるだけでした。五郎まとは、南隣りの山田吾三さんの弟で小学四年生です。その家とボク

の実家の門口とは、一、二、三mぐらゐしか離れていないから、わずかな数秒の間に声帯がどうかなったのでしょうか。しかし別段、ノドには異状を感じませんでした。

「そうか、お前は今日、明建様で、何かげられたことをせなんだかえ。そこらに小便でもしてこなかったかえ」と、父が聞いたので、

一日のことをふり返ってみました。すると、境内で飛び遊んでいたうちに、一度小便をしたことを思い出しました。大鳥居前の横大門通りが終わる右側付近に、縦二m×横一m×深さ一、二mぐらゐで、

コンクリート練りで石積みのみ新しいツボがありました。雨水が三〇cmばかり留まっています、落ちてたのか一匹の蛙が、水面に頭を出していました。その蛙の逃げ

い出しました。

そのことを父母に話したら、「やっばりそうか。そもそも、明建様でカゼをひいて来て声が出んようになったんかも知れん。飯をようけ食って、炬燵によろしくとまって寝りゃなおるさ」と、母

が言いました。かといって、べつにカゼ薬を飲ませてくれたわけではございません。ボクは、家の仕舞い飯を大あわてに食って、言われた通り三尺炬燵にもぐると、すぐ疲れのため寝てしまいました。

翌朝目が覚めてみたら、いつ移されたのかボクの寢床に寝ていました。「オーイ」と、寝たまま、ためによびました。黄ないような呼び声

が家中をつつぬけたようです。母が驚いてかけつけました。そしてすっかり疲れもなおっていて、また元氣よく学校へ行きました。

ボクは、カゼなどひいて全く声が出なくなつたことは一度もありません。だからこの珍現象は、ボクの人生で、最大の不思議・疑問となつて鮮明な記憶に残りました。

戦後まも無いころ、ふとしたことで、そのころ明建に住んでみえた尾藤トキさん(現在大阪府大東市住、八八歳)と知り合いました。

トキさんは長崎生まれで、明建の尾藤竹三さん(尾藤圭司さんの父寛二さんの兄、明治一四年生、昭和二八年明建で死亡)と結婚し、

二男四女をもうけました。明建にトキさんを訪ねたある日、ボクが明建様のバチに当たった話をしたら、「不思議じゃありません。明建様は、とってもきれいな

さだから、けがれたことをするとすぐバチが当たります」と言っているいろいろな実例を話されました。ついでに、次のような夫の体験を話してくれました。以下、ワタシとはトキさん自身のことです。

夫の竹三は、なかなかのやり手で、二〇代の時、警察官として日本の植民地となった朝鮮の総督府に勤めました。そのかたわらに中国語を勉強して、のち青島日本領事館の通訳になりました。しかし、

小学校四年までしか出ておらず、学歴偏重の世の中になつていたので、そこを辞めました。そうして青島で商売の道に入りました。合

資会社三五商會を設立して社長として、船を持って物産の運輸・倉庫業・金融業・漁業など、手を広げ、漁業関係では山東水産株式会社という遠洋捕鯨の会長も勤めました。戦後の石油王、出光さんとも友人でした。

ところが、支那事変が起き、大東亜戦争・第二次世界大戦へとエスカレートをし、多くの持ち船が日本軍に徴発され、商売が立ち行かなくなりました。敗戦間近になった時、青島・北支方面の日本在住者は、続々日本へ引き揚げるようになりました。

夫竹三も、昭和二〇年五月上旬青島の商売を一応閉じて七〇〇万円の日本宛て送金小切手（現在の一四〇億円以上）に替えて、家族全員が青島を立ちました。山海関を経て、朝鮮羅津港から二昼夜の

船足で、同年七月上旬ころ新潟港に着きました。敗戦の一月月余り前のことです。

羅津港を出る時、これがもう最後の引き揚げ船だ、前に出港した船はみな敵の潜水艦に沈められていると聞かされて、帰郷心はつものもの生きた心地がしない思いでした。

ワタシたちは一等船室に乗りました。夜の出港となりましたが、夫の竹三はやはり心配だったのか、一人船橋に出て、潜水艦が発射した魚雷の航跡でも見えないかと、暗い海を見渡していました。

すると航跡の泡渦が盛り上がり、ている船尾の海上に、日ごろ念じていた氏神明建様の妙見大菩薩が、明らかに示現しました。電気が打たれたように、その妙見大菩薩に向かつて一心に祈り続けました。示現が消えて、夫はいそいでワタシ達の部屋に戻り、いま靈験したことを話し、ワタシ達の船は妙見大菩薩が守っていてくださるから、無事に日本へ帰れると言いました。

夫は、毎日朝晩、妙見大菩薩を祭った神棚の前で、真剣に祝詞を上げていましたから、夫の言を非

常にありがたく聞きました。船が無事に新潟港へ入った時、この船も沈められるかと思っていたのに、全く奇跡的だと言って関係者は感嘆していました。間もなく敗戦となったので、全

大野口の旧道は語る

村井正蔵

この冬のある日、下剣川添地区

を雪に降られながら一人歩いて家への帰り道のことである。その時ふと私の心に語りかけて来たものがあつた。

今は近辺の人達にもほとんど利用されることもなくなった大野口の旧道であつた。

たまたまこの道から西と北へ一〇〇メートル余りの所を、国道一五六号線と広域農道が走り、絶え間なく車とトラック、バスが地響きたてながら走っている有様……

「まあ聞いておくれよ、今でこそ草が一面に生え、ここに道があつたことすら忘れられているので

財産の莫大な送金小切手はフイになりました。（以上の話は、牧の尾藤英夫さんの奥さん佐和子さん、トキさんの三女によって補足しました。）

は……

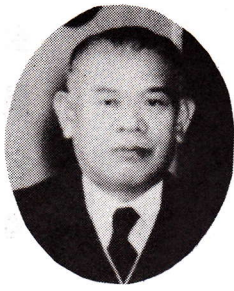
でもこの道路の歴史は古く、永い永い間、大間見を通じ那留に至る交通文化の大動脈として重要な使命をもち、無数の人達に愛用されて来た存在だったのです。その面影も時代の流れと共に姿を消し、今では僅か一・三百メートルとなつてしまつたもの。

大正の初期頃までは、路巾も約一メートル余りであつたが、この路を通り八幡方面へ、生活用品、食塩、石灰（肥料？）などを求めに出向く人、また多くの年貢米を運ぶ荷馬など総てこの一本道を通つたものです。当時までは、塩

を買うにもわざわざコウズチ（今の美濃市）へ出かけねばならず、朝暗いうちに起きて、股ひきに半てん姿、脛に脚絆をあて、素足の甲を布の甲蓋で包み、わらじを履き、身仕度を整えたもの、そして日頃愛育している駄馬に大きな荷つけ鞍をつけ、その上に飼餌袋と馬の薬ぐつや馬ゴザなどをくくりつけて、妻の作ってくれた昼飯の弁当を肩に、立ゴザを羽織り、スゲ笠を被り、ぶらぶら提灯を持って馬と共に出かけたものでした。

コウズチまでの往復一六里（約六四キロ）の行程はとても夕方までに家に帰ることは無理でした。途中何か所か峠があり、くねくねと曲つた山道を駄馬と共に淋しく越したことも幾度かあつた。

年貢米を背負つて汗を流しながら、通る小柄な木曾馬や、小裾をまくり上げた花嫁を伴った紋付姿の一行、三味線を持ち、長い杖をついたゴゼ連れ衆等々、この道の想い出は、大間見川の流れのように果てしなく限りがありませんよ」と語ってくれるような思ひだつた。



写真は 尾藤 竹三さん

會員名簿

(順序不同)

(氏名)	(役名)	(電話番号)
日置 繁		二二五〇四
大野 隆成		二二二〇〇
藤代 順行		三〇六〇〇
大野 紀子		二二二〇〇
清水 作衛 (理事)		三〇八六〇
小野江 運量		二二七二六
山下 直美		三九三三八
小池 八重子		二二二〇九
藤沢 五三郎		三一六一六
日置 幸雄		二二七七〇
池田 充彦		二二七九六
池田 栄枝		三〇九〇〇
小野江 勉		二二七二五
小野江 利久		二二七〇二
日置 智恵子		三〇五二〇
松井 直 (理事)		四〇八五五
松井 博		三三九〇八
松井 徳龍		三三九一〇
坪井 政夫		四〇九二二
坪井 庄市		三五〇〇四
古田 忠		四〇九〇〇
井口 一男		四〇二〇〇
佐藤 秀夫		四〇〇〇一
佐藤 光一		三三〇一〇
日置 智夫		二七三三〇
河合 芳英		二一三〇四
河合 芳英		三三〇三二
山下 ふみゑ		三三二二七
《大間見》		
野田 直治 (会長)		二二八五五
野田 茂 (理事)		二二八八五
青木 新三		二四三三六
村井 正蔵 (監事)		二二二二三
石神 堯生		二二四一三
井保 初枝		二二七五八
寛 明代		二二五三二
稲葉 春吉		二二五〇三
黒岩 さくゑ		二二四六〇
桑田 和子		二二四一九
桑田 昌保 (理事)		二二五二一
井上 渥美		二二四四六
桑田 信夫		二二四一三
黒岩 弘巳		二二四五八
三島 秋男		二二四六一
《徳永》		
木島 観一		二二〇二二
木島 洋女		二二五九一
木島 泉 (理事)		四一八二二
土松 新逸 (常任理事 會計)		二二七三一
鷺見 鈴子		二二〇〇五
田中まさを (理事)		二二〇六七
鷺見 おと		二二八九九
直井すゝ江		三三九二二
矢野原 幸子		二二〇七七
鷺見 ゆき		二二二八九
畑中 文枝		二二三八二
遠藤 賢逸		二二二二一
渡辺 明夫		二二六九五
木島 三郎		三三九一〇
山内喜久子		二二六一六
《河辺》		
田中喜一郎		三三九一〇
清水美佐子		二二〇二二
清水 貞子 (理事)		二二〇五二
清水 幸江		二二〇一九
尾藤 元子		二二四七
横枕 千代子 (理事)		二二三八九
前田 孝		二二〇一〇
岩谷ますの		三三三六二
《神路》		
森 忠敬 (理事)		二二〇八三
白田 尊徳		三三三三〇
和田 月男		三三六六三
山田 真人		二二一四
羽生 清		二二二七一
《牧》		
栗飯原 高照		二二二六二
土松 康二		二二七二九
日置 貞一		二二六六二
滝日 準一 (理事)		二二七〇五
土松 貞二		三三九八〇
日置 昇		三三六三六
遠藤 光平		三三九八一
滝日 治		三三九〇六
松森 益吉		三三九二二
加藤 一男 (理事)		二二八七〇
日置 一朗		三三六七四
遠藤 周一		二二八九〇
田口 勇治		三三九五〇
日置 元衛		三三九一七
清水 定		二二七一〇
粥川 溜		三三三八七
本田 欣一		三三六〇〇
金子 徹		三三二二六
齊藤 太門		三三九二二
《栗巢》		
島崎 増造 (監事)		二二二六六
増田 洋子		四〇四一
中山周左衛門 (理事)		二二二八
武田 信康		二二二八四
鷺見 豊夫		二二七八八
《古道》		
松井 弘雄 (理事)		二二七九五
細川 優		二二八六一
《名皿部》		
尾藤 由		三三三三〇
有代 喜平		二二〇〇一
有代 信吾 (理事 書記)		三三九一
森下 正則		三三九一三
下広 茂一		三三九九五
《島》		
森藤 幸 (副会長)		二二七〇六
森藤 雅毅		二二六八四
奥田 保次		二二二二二
奥田 守		二二二九〇
此島 広 (顧問)		二二四八〇
須甲 甚一		二二六六一
山田 長次 (理事)		三三六四八
山田 昌枝		三三六四八
森 数雄		二二五五四
山田 良		二二七九一
山田 良一		二二七八
松井 京二		三三三八二
直井 篤美		二二六二二
《落部》		
若山 清		二二八一七

昭和五九年度 事業報告

寺、昌満寺等

一〇月九日

○役員会

於村民センター 一四名出席

奈良方面文化財見学について

文化財の保護について

文化財やまと第一〇号発刊につ

いて

一月三、四日

○村民祭に参加

東氏館跡出土品の展示

一月八、九日

○奈良方面文化財見学二三名参加

奈良博物館（正倉院展）、興福

寺、春日神社（秋の名宝展）、

橿原考古学研究所（大和の埴輪

展）、高松塚古墳、飛鳥資料館

等

一月二十九日

○役員会

於村民センター 一九名出席

文化財やまと第一〇号発刊につ

き原稿募集について

文化財保護の徹底について

東氏文化顕彰会設立に協力方

について

三月二十九日

○役員会

於村民センター 一二名出席

昭和五九年度事業報告案並に収

三月三十一日

○会報「文化財やまと」第一〇号

の発刊

佳作賞

笠松町 棚橋智恵子

百姓に精魂こめよという唄にこれ

で百円よと菜の山を出す

高富町 信田 貞子

屈みつつ流れに洗う鍬先に青みづ

みづし川芹萌ゆる

八幡町 細川 美子

諾へぬ言葉返りく明日待ちて聴か

むよ花の芽ほどくけはいを

岐阜市 大橋 敦子

齟齬多き身のうらおもてさらしゆ

く吾れか淡墨の短冊吊す

岐阜市 毛利 静枝

秘めしもの奥処に住まわす何もな

し或日つらつら吾れの横顔

八幡町 松井とし子

針持つ術知らぬ女に育ちし娘の研

究授業ひそかに見たし

大和村 金子まさ子

積みきれぬ親の思いをいっばいに

のせて出立ちぬ嫁ぐ娘の荷は

大和村 森下 照美

ついにひと日夫の口より出ぬまま

に昏れてしまひぬ婚の記念日

各務原市 大橋 基久

遠つ世の女も性の深処より手を差

し伸ぶる姿に彫らる

支決算案

昭和六〇年度事業計画案並に収

支予算案

役員改選について

第一回東氏文化顕彰 短歌大会入賞歌

優秀賞

大会賞

八幡町 藤川五百子

堅香子の片葉幼しかりそめの逢ひ

あたたむる日だまりありて

顕彰会長賞

岐阜市 渡辺 克己

今日の客の残しし指紋に息を吹き

明日に対してケースを磨く

文化協会会長賞

岐阜市 小木曾喜与子

あやしつ孫の写真を撮る夫の弾

みいてわれの知らざりし声

村長賞

各務原市 笹嶋 松枝

本音言はぬままに暮れたる夜半の

湯に抱へて洗ふわが膝小僧

公民館長賞

岐阜市 遠藤 敬子

風の街にあかぎれ膏を買いにゆき

し母よ小さき貝焙りいむ

佳作賞

岐阜市 安部 光代

きさらぎの淡雪白き墓道にはるか

となりぬ亡父が命日

- 五月二六日
 - 総会
 - 於村民センター 四七名出席
 - 昭和五八年度事業報告および収
 - 支決算承認について
 - 昭和五九年度事業計画および収
 - 支予算承認について
 - 記念講演
 - 「インスタント文化の背景」
 - 講師 岐阜県文化財保護協会長 松田充先生
- 六月一七日
 - 和良方面文化財見学二四名参加
 - 宮代白山神社、遠藤提防、戸隠
 - 神社、和良殿跡、念興寺、寛證
 - 寺、陣屋跡、祖師野神社、東林

- 五月二六日
 - 役員会
 - 於村民センター 一四名出席
 - 文化財の保護について
 - 文化財やまと第一〇号発刊につ
 - いて
 - 村民祭に参加
 - 東氏館跡出土品の展示
 - 奈良方面文化財見学二三名参加
 - 奈良博物館（正倉院展）、興福
 - 寺、春日神社（秋の名宝展）、
 - 橿原考古学研究所（大和の埴輪
 - 展）、高松塚古墳、飛鳥資料館
 - 等
 - 役員会
 - 於村民センター 一九名出席
 - 文化財やまと第一〇号発刊につ
 - き原稿募集について
 - 文化財保護の徹底について
 - 東氏文化顕彰会設立に協力方
 - について
- 六月一七日
 - 役員会
 - 於村民センター 一二名出席
 - 昭和五九年度事業報告案並に収

昭和六十年度 事業計画

一、会議

- ・総会の開催 五月二六日
- ・役員会の開催 四・六・九
- 一・三の各月及び臨時
会・常任委員会の開催 随時

二、見学及び研修会

- ・文化財に関する講演会 五月二六日
- ・郡内文化財の見学 六月上旬
(八幡町の文化財)
- ・京都方面の文化財見学
(一泊二日)一〇月下旬

- ・県本部主催研修会に参加
- ・村民祭に参加
- ・その他臨時文化財見学

- 三、会報「文化財やまと」の発行
A五版一四ページ
三〇〇部 三月

昭和59年度会計報告

収入の部		決 算 額
1. 前年度繰越金	費	3,272.6
2. 会費	費	274,000
3. 特別会費	費	636,500
4. 補助金	入	45,000
5. 諸収入		3,980
	計	992,206

支出の部		決 算 額
1. 会議費	費	28,490
	費	3,400
	費	25,090
2. 事業費	費	759,590
	費	699,590
3. 事務費	費	6,000
	費	2,790
	費	9,740
	費	15,200
	費	2,960
4. 負担金		138,000
5. 予備費		95,398
	計	3,822.6

昭和60年度予算

収入の部		予 算 額
1. 前年度繰越金	費	3,226
2. 会費	費	272,000
3. 特別会費	費	633,000
4. 補助金	入	43,000
5. 諸収入		3,774
	計	990,000

支出の部		予 算 額
1. 会議費	費	60,000
	費	20,000
	費	40,000
2. 事業費	費	740,000
	費	670,000
3. 事務費	費	70,000
	費	45,000
	費	10,000
	費	25,000
	費	10,000
4. 負担金		137,000
5. 予備費		99,000
	計	990,000

文化財の愛護に ご参加下さい

○文化財は、祖先が遺してくれた貴重な公共財産です。わたくしたちの身近かな所にある数多の文化財をみんなの力でしっかりと護ってゆきましょう。

○大和村文化財保護協会が発足してから早や十年目です。ここでみなさん力を合せて一層の発展を期しましょう。どうか身近かな人に声をかけて会員の増加にご協力下さるようお願いいたします。

○本会々員は、岐阜県文化財保護協会会員でもあり、会員には、岐阜県文化財保護協会発刊の「濃飛の文化財」(年二回)「文化財美濃と飛騨」(特集)をお届けします。また、本会の会報「文化財やまと」をお届けします。

その他、本会及び県本部主催の文化財見学会講演会、研究会に参加できます。

会員となるには、会費二〇〇〇円を添えて、最寄りの本会理事又は本会事務局(大和村教育委員会内)へお申し込み下さい。

編集後記

☆ 今年はずれていた春が急に走って来たような格好で、梅と桜と桃がほとんど一緒に咲きました。皆さんには、ますますお元気で、春の息吹の中にご活躍のことと思います。

☆ 会報第十号をお届けします。今回は皆さんの原稿が少なかつたので、東氏文化顕彰会のことを載せました。東氏文化は大和村の誇りとするところであり、みんなの力で護ってゆくとともにぐんぐん伸ばしてゆきましょう。

☆ 皆さんの原稿をもっと沢山いただきたいと思えます。随想、短歌、俳句、村の行事やきたりなど、何でも結構ですからどうぞしどしど寄せ下さい。

☆ 本会報の発行が大変遅れましたことをおわび申し上げます。これから日毎に暑くなり、農事もせわしくなりますが、どうぞ一層のご自愛をお祈り申し上げます。

(土松記)